（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　飯島　孝良

「一休「像」の戦後史」という題目が示すように、本論文は、一休宗純についての直接的研究ではなく、きわめて名高いながら歴史的実像は不明のところの多いこの十五世紀の禅僧が、近代日本、とくに第二次大戦後になってにわかに知識人の関心をかき立て、さまざまな一休「像」が形成されてきたこと自体に着目したものである。それら多様な一休「像」の内容を丁寧に検討することで、「禅」という日本宗教史上に重要な一伝統が、近代日本においてどのような意義を担わされ、託されてきたかを解明しようとする。したがって本論文は、第一義的には「近代」日本精神史、宗教思想史の研究となるが、それは同時に、一休自身の実像に迫るために必須の作業としての意味も有しており、「伝統」というものを現代的観点から重層的なパースペクティブのなかでとらえようとする試みでもある。

まず序章において、上記のような視点のもとに一休「像」を検討することの方法論的意義が説明される。併せて、一休の実像にかんする研究の現況、「とんち坊主」像が形成されていった近世以降の一休像の状況について、堅実な確認がなされる。飯島氏は中世以来の禅文献についても専門的知識を有している。続いて、近代日本における重要な一休「像」の提出者たちについて、順次精細な検討がなされていく。具体的には、前田利鎌と武者小路実篤（第一章）、唐木順三（第二章）、芳賀幸四郎（第三章）、市川白弦（第四章）、柳田聖山（第五章）、水上勉と加藤周一（第六章）が扱われる。各章とも、該博な知識と綿密かつ広範な文献読解に基づいて著されているが、とくに、各著者たちがどのような問題関心から一休に関心をもつにいたったのかを、時代状況とそれぞれのライフヒストリーに即して明らかにする作業がまずなされる。そしてそれに基づいて、それぞれの著者が直面した問いに応える者として各自の一休「像」が描かれていった経緯が解明され、「像」の内実が分析されていく。各章とも重厚で読み応えのある記述であり、各著者についての個別研究としての水準も獲得していると評価できる。

そして終章で、さまざまな一休「像」がいわば「一休問題」として論じ合われたことの意義が総括的に考察され、彼らにとって一休が、自由、創造、民衆、個人、エロスといった近代的価値と禅ないし禅文化の伝統を接合するよすがであったことが指摘される。その際に、一休については主題的論じなかった西田幾多郎と鈴木大拙の禅理解が一貫して重要な参照項だったことも明らかにされる。

各著者をめぐる叙述の細部ついてはなお検討の余地はあるものの、近代日本の宗教的知識人による一休「像」の研究によって日本における禅の伝統の意義を捉えるという飯島氏の意欲的な試みは、全体として十分な成功を収めたと判断され、審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位授与に値するものと結論する。